

学内広報

2024.6.24

no. 1583



百五十年史編纂室の様子（絵：嵯山明音）



本郷三丁目ビルで
進む年史編纂!

→p.2,10



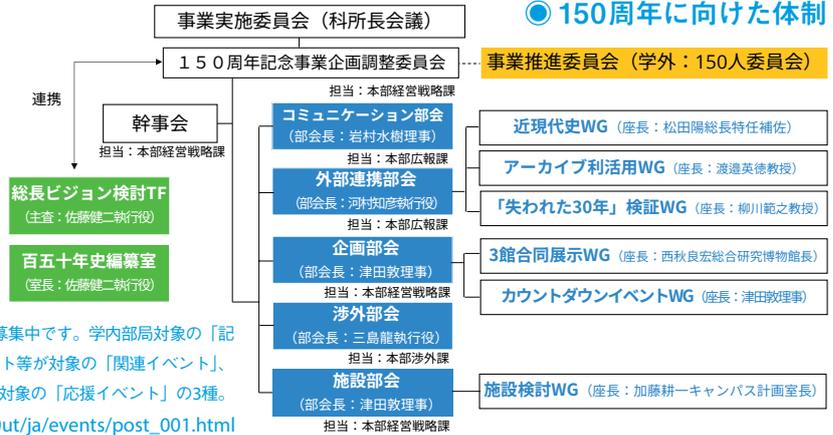
150周年カウントダウンが進行中 応用資本市場研究センターとは? デジタルアーカイブポータルがリニューアル

節目の年史編纂と記念事業の現況を確認しよう

創立150周年に向けた カウントダウンが進行中



1877年に創立された東京大学は、2027年に150周年を迎えます。大きな節目を迎えるまで、もうあと1000日と少し。全学的に進められている年史編纂と周年記念の事業について、現時点での状況をまとめて紹介します。中の人として150周年に立ち会えることの幸運を噛みしめてください。



幹事会では記念事業の参加企画を募集中です。学内部局対象の「記念イベント」、研究室やプロジェクト等が対象の「関連イベント」、学生団体や卒業生団体等が対象の「応援イベント」の3種。

→ https://www.u-tokyo.ac.jp/150Out/ja/events/post_001.html

●百五十年史編纂室の現在

通史と資料とテーマの3種で構成

本郷三丁目ビルの編纂室で、専任教員2人、事務職員1人に加え、特任研究員やRA^{*}、オンキャンパスジョブの院生たちがリモートや対面で編纂作業を進めています。50年史も100年史も箱入りの重厚な大型本でしたが、今回は一般の人がパッと手に取れる本を目指します。予定しているのは、通史編、資料編、テーマ史編の3つです。

通史編は、戦前までを描く第1巻、新制大学になってから東大紛争前後までの第2巻、それ以降の第3巻で構成予定です。第2巻と第3巻をどこで切るかはまだ検討中ですが、教養学部への再重視や大学院の変革など、現在につながる諸改革の発端となった立川移転構想が分け目になるかと思えます。2027年の周年式典で可能な限りを披露したいですし、東大史の講義も始めました。現在、関連本の執筆者に話を聞いたり、加藤一郎総長時代の報告書を読み込んだりしながら目次を組み立てている最中。並行して、『学内広報』『東大新聞』『教養学部報』などの基礎資料の整理とデータベース化を進めています。文学部次世代人文学開発センター人文情報学部門の院生が、記事を検索エンジンで探せるよう尽力しています。

データベースは、後に資料編として活用

されます。100年史では印刷物でしたが、今回は検索しやすいデジタルコンテンツを想定。

将来的には100年

史の資料も含めて過去の資料と現在の資料を比較できるようにもしたいです。紙だとその時点での決定版という意義があるので、少数を印刷することは考えています。

テーマ史編は、「150年史叢書」のようなシリーズ企画を検討中です。大学全体の動きを記す通史編には向かない題材を選び、コンパクトな書籍に仕立てます。進んでいるのはバリアフリー史と女性史です。前者では、バリアフリー推進室の発足に関わった職員、障害の当事者として入学した初期の学生、障害のある研究者の道を開拓した教員などへの聞き取りを行っています。後者では、個々の経験ではなく、女性と東大の関係を通史的に追う内容を目指します。そのほか、キャンパス、戦争、大学紛争、災害、スポーツなども候補です。

編纂の状況を伝えるため、1月に『一五〇年史編纂室通信』(季刊)を創刊し、学内で配布しています。Xでの発信も始め、学内スポットと歴史を結ぶ企画を展開中。**#東大さんぽクイズ**で調べてみてください。



文書館 准教授
中西啓太

●外部連携部会 近現代史WGの現在

東大紛争の資料を硬派な番組に

放送開始から2025年で100周年となるNHKと、150周年を2027年に迎える東大。大きな節目を控えた両者が、2023年に包括連携協定を結びました。教育研究の振興と人材育成、社会的課題の解決や地域社会の活性化が目的です。具体的には双方の資産を活用して番組を作ったり、展示やイベントを行ったりすることが期待されます。

「ブラタモリ」のようなカジュアルで有用なコンテンツをという意見も出ましたが、東大に関わるのだから、まずは硬派な番組を丁寧に制作しようということで、近現代史を中心にしたドキュメンタリーを考えることになり、1月に発足したのが近現代史WGです。文学部の鈴木淳先生と私、文書館の森本祥子先生と中西啓太先生が実働メンバーです。NHKからは「NHKスペシャル」「ETV特集」など、歴史のドキュメンタリーを得意とするプロデューサー陣が参加しており、東大の卒業生もいます。

3月にはNHKのチームが東大に来て、文書館などの資料を調査しました。現在はまだ、両者が擁する資料を整理している最中ですが、番組のテーマとしては、東大と国家、東大紛争、戦争と東大などが候補にあがっています。東大紛争は、存命の関係者

^{*}リサーチ・アシスタント



Countdown to 150th
1027 days

500日前、100日前といった今後訪れる節目にはどんなイベントが行われるのでしょうか？



ダイドードリンク中島孝徳代表取締役社長にも応援キャンペーンにご参加いただきました。

●コミュニケーション部会

周年の気運醸成のために150周年記念特設サイトを開設。150周年への想いを「響存」のキャッチコピーに込め、2027年4月12日までのカウントダウンを表示しています。記念ロゴマークは、基本形に加え「We ♥ UTokyo」などのメッセージ入りも用意。学生や卒業生の団体にも開放し、営利目的での利用も可能です。学生や卒業生や各界のVIPといった皆さんがロゴのパネルを持って撮った写真を並べる応援プロジェクト、ロゴをハッシュタグつきでSNS発信する「#ロゴで応援」プロジェクトも展開中。そのほか、東大のシンボルをフィギュア化するカプセルトイを企画し、2025年春の販売開始を目指しています。

●渉外部会

150周年までに寄付金額150億円を集めることを目標として2022年10月に開始した使途一任型の基盤基金UTokyo NEXT150には、これまでに累計30億円以上の寄付が集まっており、法人・卒業生・個人の皆様への依頼を活発化させています。3月にはダイドードリンク様のご支援を受けて150周年記念事業応援型自動販売機の設置を開始。売上の一定割合が寄付金となる自販機は、現在、本郷通りなど本郷キャンパス周辺の計8カ所に設置されています。施設部会と連携しながら、赤門周辺の歴史的環境整備事業とD&I推進プロジェクトの寄付募集開始も予定しています。

●企画部会

過去を振り返り未来を考えるカウントダウンイベントを企画しています。安田講堂を会場に、年2～3回の開催を想定しており、第1回は「民主主義と東京大学」をテーマに7月27日(土)に開催します。政治学・歴史学・教育学の研究者(宇野重規、荻部直、加藤陽子、小玉重夫)に加え、街宣車を使わない新しい選挙スタイルで話題を呼んだつくば市議会議員の川久保皆実さん(本学卒業生)が登場します。第2回は「スポーツと東京大学」をテーマに10月19日(土)に開催の予定。また、図書館・文書館・博物館による初の3館連携となる記念展示も実施の予定です。

●施設部会

150周年事業では、本郷キャンパスで最古級のものが集結する赤門エリアの環境を整備することを検討しています。候補となっているのは、東大のシンボルである赤門(1827年～)の耐震工事、関東大震災の被災を免れた建物としても知られるUTCC(1910年～)の改修、そして一帯の発掘作業のなかで見つかった加賀藩の石組遺構の整備の3つです。遺構については、周辺を整備して解説パネルを設け、キャンパスを訪れた人が見学できるような展示にする構想が進展中。施設検討WGが中心になって詳細な整備計画やその中の優先順位を練りつつ、寄付獲得のための道筋の構築を始めています。



人文社会系研究科 准教授
松田 陽

もいて難しい部分もあります、NHKが制作し、東大は資料を提供するという形だったら可能性はありそ

う。文書館には、未整理のものも含め、当時のビラやヘルメットなど、東大紛争の資料が多く残ります。整理済みの資料しか公開できないという制約はありますが、150周年が好機であることは間違いありません。

振り返ると、120周年の際に大きな取り組みが多数ありました。その一つに当時の各部局を紹介した映像作品があります。かなりの労力と予算を投入して制作されたものの、諸般の事情からお蔵入りになっていた貴重映像です。日の目を見せるならこの機会しかないでしょう。東大出身の巨匠・吉田喜重監督が撮った記念映画もあります。これは公開済みですが、小川三四郎が現代の東大構内に現れたという気になる設定。再び光を当てる意義は大きいはず。

もちろんNHK側にも資料は膨大にあり、川口市にあるアーカイブズはあまりにも収蔵が多すぎて、調べ出したら收拾がつかないかもと言われています。双方の膨大な歴史資料と向き合い、2027年までに複数の番組を形にして世に問いたいと思います。

外部連携部会 ●アーカイブ利活用 WG の現在

災害への対応と記録の両面から

NHKとの組織間連携の進展を機に、津田敦理事からWGの打診をいただきました。災害対応をテーマにしたセミナーを3月に福武ホールで開催し、能登半島地震などの災害をテーマに双方の関係者が議論を行いました。そこで話したデジタルマップの構想がWGの活動につながっています。

大災害の際、報道機関は被災地の状況を3Dスキャンしています。非常に高精細&大容量で、通常のPCでは開けないデータとなります。これを使って、見る人が自由に操作できるマップを作り、多くの人にリアルタイムで災害状況を伝えたいのです。全国に支局を持つNHKは、災害時に迅速に現場に赴いて状況をドローンでスキャンできます。それを素早くマップに変換して公開すれば、被害の確認、住民の避難、支援物資の運搬といった対応に直結します。

実証実験として今回研究室で作った2016年の熊本地震のマップでは、データ受領から公開までほんの数時間。技術の進歩で処理速度が以前より上がりました。3DゴーグルをつけてVR空間に入り、より如実に被災地を感じる試みも始めています。

マップにはアーカイブの意義もあります。災害から時間がたつと人は被害の中身を忘

れてしまいがち。災害から○周年の節目に被害を再確認してその後に備えるといった取り組みに有効です。

今秋に向けて、阪神淡路大震災のデータを使って視覚障害者が地震をどのように体験したかを考える企画も検討中です。真っ暗な空間で当日の音響を追体験するもの。被災地にはもちろん視覚障害の人もいます。彼らにとって必要な備えは何かを議論したい。前に広島市のアーカイブを作った際、視覚障害の被爆者に話を聞きました。「ピカドン」といいますが、その方は「ドン」の印象だけを語っていました。障害者は情報弱者になる場合が多いですが、たとえば災害時に地下の暗闇にいたとすると、視覚以外の感覚を使うのに慣れた人のほうが状況を把握できるかもしれません。NHKの番組化も含めて考えようと思っています。

まずは災害を切り口にしましたが、東大の歴史的建築を活用する手もあります。昨年、関東大震災時の陸軍の空撮写真を現代のマップに重ねる展示を国立科学博物館で行いましたが、これの東大版をやりたいですね。150年間蓄積してきたキャンパス写真を使うといういろいろできそう楽しみです。



情報学環 教授
渡邊英徳

エンダウメント型研究機構の第1号

応用資本市場 研究センターとは?

UTokyo Center for Capital Markets Research

2023年10月、総長室総括委員会の下に新しい機構が設置されました。日本経済のグランドデザインを描く政策を提言する、本学初のエンダウメント型組織です。4月に就任したセンター長に、応用資本市場研究とは何か、どんな提言を打ち出していくのかなど紹介いただきました。

→センターの研究室がある大手町ビル7階のオフィスにて



忽那先生の共編著『MBAアントレプレナー・ファイナンス入門』(中央経済社、2013年)



センター長
忽那憲治
KUTSUNA Kenji

資本市場の機能で日本を活性化

教員として22年過ごした神戸大学から、4月に東大に赴任しました。大企業対象のコーポレートファイナンスとスタートアップなどが対象のアントレプレナーファイナンスがありますが、私の専門は後者です。

昨年、松本大さんと相原博昭理事のお二人から打診をいただきました。10月の発足時からという話もありましたが、担っていた授業などの都合があり、新年度からの就任となりました。国のお金の制約については前職でも感じており、資本市場の機能を活用して日本を元気にという構想はすばらしいと思いました。研究を軸に日本を良いほうに向かわせたいと思い、センター長を引き受けました。個人的には還暦を迎える時期に新しい試みを始められて幸運です。

センターは資本市場の機能を活用して企業の生産性を高めることに焦点を絞ります。社会への影響力が強い大企業と、大多数を占める中小企業や今後を担うスタートアッ

プの両方が活性化しないと、日本の競争力は回復しません。主な目的は、提言によって政策や企業の行動を変えるようなインパクトを与えること。テーマを設定し、政策提言をまとめて発表し、関係経済団体に働きかけ、政策に関わる官庁や立法に関わる政治家にも理解を求めます。提言で社会を動かすことに重点を置いています。

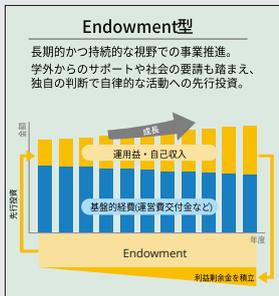
日本の個人金融資産は2000兆円超ですが、銀行に預けっぱなしの人が多数派です。そこをうまく転換できれば企業にも好影響が及びます。日本では高度経済成長時代に構築されたヒト・モノ・カネの仕組みが現実とずれつつある。従来は企業が何か始めるなら銀行からお金を借りるのが主でしたが、新しいことを始めるにはある程度リスクテイクが可能な投資家の機能が必要です。企業が成長すれば銀行からの調達も有効ですが、資本市場を使わないと越えられない段階がある。日本の起業家が資本市場から資金を調達するケースはまだ限定的です。新規上場した企業もなかなか成長できてお

らず、資本市場の機能が十分に活用されていません。資金の調達側、供給側、政策側の3つがからむ領域に挑んでいきます。

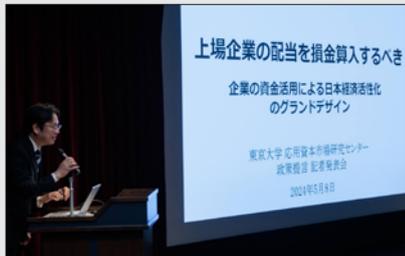
初提言のテーマは配当の損金算入

5月発表の第1号レポートでは、「上場企業の配当を損金算入するべき」との提言を行いました。インパクトが大きすぎてそれほど大幅な変更が必要でないものという意図でこのテーマを選びました。大企業が株主に払う配当金を損金に算入すれば、株価上昇の起点となり、経済が活性化するはずです。短期的には税金が減りますが、配当増で株価が上がればキャピタルゲインの課税を通じて税金が別の形で増えます。十分に成り立つ理屈ですが、短期的な税金減への理解が得られるかが鍵。フェローやアドバイザーの力を借りてステークホルダーへの働きかけを進めます。今後は3ヶ月に1本のペースで提言の発表を続けます。8月発表を目指す第2号レポートではスタートアップ対象のものを念頭に議論しています。

私が想定しているのは、テーマごとに適した人をフェローに呼んで活動してもらう形。様々なクラブから集まる日本代表がW杯を目指すイメージです。学内の先生方とも連携したいですね。オフィスが東京大学エクステンションの隣にある関係で、リカレント教育の「イノベーション&ファイナンススクール」の準備も進めています。



←10億円の寄付金があったとして、たとえば年1億円ずつ使って10年で終了するのが従来型。エンダウメント型では、原資の10億円には手をつけずに運用益だけで組織を運営します。10年たっても原資の10億円は手元に残ることとなり、恒久的な活動が可能になります。
↓5月8日に小柴ホールで行われた政策提言第1号の記者発表で説明した後藤達也フェロー（経済ジャーナリスト）。配当が損金算入されると配当額が30から43へと増えることをわかりやすく紹介しました。
→記者発表の場で思いを語る松本大アドバイザー（右から2番目）。ヒト・モノ・カネに適切な配置がなされれば日本経済は持ち直すことができることを鉄下駄とスニーカーの喩えも使って紹介しました。



| | 現状 | 本提言 |
|-------|------|-----------|
| 税引前利益 | 100 | 100 |
| 税控除 | 0 | (43) |
| 課税利益 | 100 | 57 |
| 税率 | 30% | 30% |
| 支払法人税 | (30) | (17) |
| 純利益 | 70 | 83 |
| 支払配当金 | (30) | (43) +43% |
| 内部留保 | 40 | 40 |
| 配当性向 | 43% | 52% |





東京大学デジタルアーカイブポータル
UTokyo Digital Archive Portal

デジタルアーカイブのポータルがリニューアル!!

デジタル万華鏡
東大の多様な「学術資産」を再確認しよう
特別版

掲載画像：『図書館』は附属図書館、『博物館』は総合研究博物館、『文書館』は文書館の所蔵。①図書館「夜無情浮世有様 かけ合いせりふ」②博物館「(三宅秀印章)」③博物館「Cloud Photo 10 No.11 (立体)」④文書館「『修史館へ図書集成二十五冊返却の件』」⑤図書館「摺拾印刷雑帖」⑥図書館「ゲーテ自署付書簡 [Letter] Weimar, 29. Dcbr. 1822」⑦博物館「クラウン・グラフォフォンBQ型 Graphophone Crown Type BQ」⑧文書館「〔台紙付き写真 1904 (明治37) 年第一高等学校二部学生卒業写真〕」⑨図書館 Vedula del Mausoleo d'Elio Adriano (ora chiamato Castello S. Angelo, nella parte opposta alla facciata dentro al Castello). ⑩図書館「源氏物語」

個別のシステムを再構築してより安定した運用が可能に

東京大学では、附属図書館、総合研究博物館、文書館、情報基盤センターが中心となり、本学が所有する学術資産のデジタル化を支援し、その公開とデータ活用を促進する「東京大学デジタルアーカイブ構築事業」を実施しています。このたび、本事業で提供してきたシステムを統合し、「東京大学デジタルアーカイブポータル」としてリニューアルしました。

これまで個別に運用してきたシステムを再構築することで、より安定的に運用できるようになりました。これからもデジタルアーカイブの普及に寄与し、学習・研究への利活用を支援するとともに、東京大学が保有する多様な学術資産を公開することで東京大学の魅力を発信していきます。

公開中のアーカイブの利用はもちろんですが、研究室で公開しているデジタル画像などがありましたら、本ポータルへの参加をぜひご検討ください。



<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/>

東京大学デジタルアーカイブポータルとは？

- 1 本学の各部局・研究室等のデジタル画像を公開するデジタルアーカイブ機能を提供しています。これにより部局で所蔵する学術資産のデジタル化と公開を促進します。
- 2 部局・研究室等で独自に構築し公開しているデジタルアーカイブのメタデータを収集し統合することで、学内のデジタルアーカイブのコンテンツを一元的に発見することができます。
- 3 学内に存在する様々な学術資産を公開しているウェブサイトへのリンクと解説をリスト形式で提供し、部局や研究室のウェブサイトに分散している学術資産の情報を一覧にすることで、発見可能性を高めています。
- 4 収録しているメタデータを、ジャパンサーチをはじめとする国内外のデータベースと連携することで、世界中から本学の学術資産にアクセスしやすくしています。

リニューアル記念パネル展示「デジタル万華鏡」を開催中！

今回の展示では、『学内広報』に掲載しているデジタルアーカイブのコラム「デジタル万華鏡」と、その中に登場するデジタルアーカイブの画像を並べて展示しています。コラム「デジタル万華鏡」は隔月で掲載しており、2024年4月号で40回を数えました。学術資産とデジタルアーカイブに関わる各部局の教職員がその魅力について説明していますので、コラムと画像をあわせてお楽しみください。デジタルアーカイブの活用例として、デジタル化した画像とテキストデータを並べて提供している事例も紹介します。



- 場所 総合図書館1階 オープンエリア
- 会期 ~7月下旬 (予定)
- 問い合わせ digital-archive@lib.u-tokyo.ac.jp



海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第32回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

目指せ、「すくすく海洋学」!

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門 准教授

福田秀樹



大槌沿岸センターを含む大気海洋研究所の教員たちは、研究結果や様々な取り組みを連載記事として学内の広報誌だけでなく、町の広報誌や新聞紙にて紹介してきました。始まりは大槌町の広報誌『広報おおつち』の「おおつち 海の勉強室」でした（2014年8月～2016年3月、月1回）。センター教員内でこの話が持ち上がった時、率直に「地域の方々に活動内容を紹介できる良い機会だ」と感じましたが、それは東日本大震災の直後にあった印象的な体験と切り離せません。

私たちは震災のあった2か月後の2011年5月より大槌湾内の環境を調査していましたが、2011年の終わりごろに地域の小学校にてこれら活動の紹介を行った時のことです。高学年の生徒から「海はゴミだらけでダメになってしまったのだから、何をしても無駄」という趣旨の発言がありました。話しているうちにテレビなどで放映される津波や海底の瓦礫の映像に対するインパクトの強さから、生徒さんが想像する海の中の様子と観測結果の間には強い乖離があることが分かってきました。調査結果の発信はそれまでも行ってきたつもりでしたが、主に漁業者に対してのものであり、一般の方が震災後の海について手に入れられる情報に比して、あまりに少ないものであることを痛感する出来事でした。

『広報おおつち』の町内の一歳児を取

り上げる「すくすく赤ちゃん」のコーナーの人気は、町外の方にはおそらく想像がつかないぐらい高いものがあります。親族やご近所の赤ちゃんの愛らしい顔を探している際に私たちの記事にも目を止めてもらえば、そしていつか、同じように楽しみにしてもらえるようになれば…。

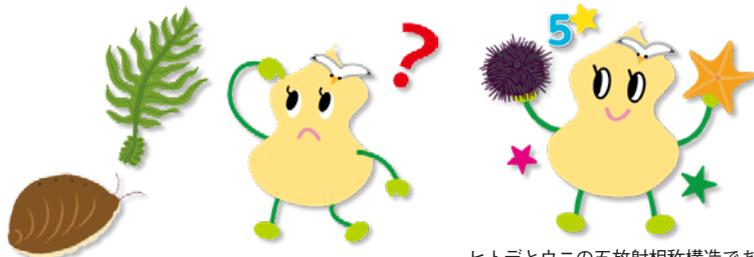
いざ、自分の出番が来て書き始めてみると、自身の専門分野が生物地球化学ということもあり、研究内容を紹介する難しさに行き当たりました。化学反応式を使わないどころか、小学校卒業までに学習する内容で理解できるように説明することは難しく、初稿を書き上げた時は、書き出しの部分で「化学が苦手な方にはちょっと難しいかもしれませんが、今回はお付き合いください」と白旗を上げるような体たらくでした。当然ながらセンターの教員から「読者に対する思いやりが全く感じられない」とのコメントをいただき、深く反省しながら書き直しましたが、今でもあの時のことを思い出すようにしています。

大気海洋研究所の教職員の連携の下、連載の舞台は『広報おおつち』から『岩手日報』の子供向け紙面「ジュニアウィークリー」、『岩手日報』本紙へと変わり



『広報おおつち』に掲載された記事

ましたが、現在でも研究結果だけでなく、調査などを手伝ってくれている高校生たちの取り組みなどを紹介しています。大槌沿岸センターのメンバーの中には「この間の記事は面白かったですよ」と町内で声を掛けられるものもあるとか。同僚に怒られたあの時から、私も二桁に届く回数の寄稿をしてきたものの、私自身はそのような声をかけてもらえたこともなく、「修行が足りない」と感じる日々ですが、連載自体に対する地域の方々の反響を糧に日々執筆者探しをしています。



マスコットのメーユちゃん。大槌町のシンボルであるひょうたん島（蓬莱島）の形をしていて、アイキヤッチャーとして町外でも活躍しています。

ヒトデとウニの五放射相称構造であることを紹介した際に使われたメーユ。「なんじゃこりゃ?」と思われても、子供たちの注意を引ければ!



自分の担当記事でなくても、「そのコーナーを読んだことがあるよ!」という声が届きます。



『海と希望の学校』公式 X (@umitokibo)

バックナンバー → www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



ぶらり 構内ショップの旅

第25回

Panes House@本郷キャンパスの巻

東大限定のトリプルバーガー

今年4月、本郷キャンパスの中央食堂にカフェチェーン店イタリアントマトが経営する「Panes House (バーネズハウス)」がオープンしました。「Panes」はイタリア語でパンを意味します。下北沢にある一号店はサンドイッチを中心とした業態ですが、本郷キャンパスのメインはハンバーガーです。

全部で6種類あるハンバーガーの中で目を引くのが、東大店だけのスペシャルメニュー「東大本郷トリプルバーガー」(フライドポテト付¥1,650)。ビーフ100%のハンバーグ3枚、とろけるチーズ、レタス、ピクルスがバンズに挟まれた、ボリュームたっぷりの一品です。そして、5月に新たに登場したのが、お得なセットメニュー「サラダコンボ」。「とろける濃厚チーズバーガー」、もしくは「やみつきサルサチキンバーガー」に、サラダ、フライドポテト、ドリンクが付いて¥1,100。出来立てを食べてもらいたいとの思いから、ハンバーグやフライドチキンなどはオーダーを受けてから、焼いたり揚げたりしますと話すのは店長の石川和久さん。同じ中央食堂にあるカフェヴィゴレの店長も務めています。バンズは厚めで食べ応えがあると説明します。

バーガー以外にピザも提供しています。メニューは定番の「マルゲリータ」(¥980)と4種のチーズを使った「クアトロフォルマッジ・ロッシ」(¥1,050)の2種類。ピザもオーダーを受けてからカウンターの後ろにある窯で焼いています。生地はクリスピーで、パリッとしていると石川さん。

「オープン当初にご指摘いただいた点を改善し、クオリティが高いものをお出ししています。機会があればぜひ食べにきてください」

価格は税込み



定番の「バーネズハウスビーフバーガー」(フライドポテト付 ¥890) 営業時間：平日11時～21時、土日祝11時～19時

<https://www.italiantomato.co.jp/todaihongo/>

いちょうの 部屋

第16回

学内マスコット放談

今回のゲスト

もりかも の巻

体験型活動・マスコットキャラクター



コマバのユータスとは親戚。家は三四郎池だが、生誕地については「とんと見当がつかぬ」とすっとぼけ、「日本より頭の中のほうが広いでしょう」と囁く漱石ファン。

いちょう 繁殖期のオスを思わせる緑色の頭に、不自然なほど銀杏の形をした足に、森印のポシェット。キミの姿を前に見たことがある気がするんだけど……。

もりかも 東大の中の人なら知ってるはずだけど、もとは第29代総長の濱田純一先生が任期中のビジョンとして策定した「行動シナリオ」の応援キャラクターだよ。キャッチコピーの「森を動かす」にちなむ「森を醸す」という言葉に共感した職員が卵を温めて、2010年に何羽か孵化したんだ。ぼくたちは、東大生をタフにする一助として始まった体験型活動をずっとならび続けてきたわけ。当然『学内広報』には何度か登場済み。ご存じだろうけど、現総長の藤井輝夫先生も「行動シナリオ」の検討に深く関わった一人だよ。**い** なるほど。総長は6年ごとに交代するけど、大学の活動には継続性が絶対大事だもんね！ちなみにほかの個体たちはどうしたの？引退しちゃった？

も 基本的に渡り鳥ということで、国内外各地に旅立っているよ。最初は体験活動プログラムだけだったけど、2017年度にフィールドスタディ型政策協働プログラム(FS)、2019年度にUTokyo Global Internship Program(UGIP)が始まり、現在の体験型活動は計3種。各プログラムの実施先で空を見上げれば、学生たちを見守る仲間が飛んでいるのがわかるはずだよ。

い とはいえ、飛行範囲は近場だけでしょ？

も 延べ4000人超が参加した体験活動プログラムだと、インド、UAE、サウジアラビア、米国、英国、豪州、スイスとか。今年は初めてケニアにも行くよ。

い 常に本郷にいる裸子植物とは大違い。

も 国内各地も行きまくりで、ご当地グルメを食べまくり。右はFSで長崎の五島に行った際の焼きハコフグだよ。

い 太って飛べなくなればいいのに(妬)。

も 現地での応援活動のほか、イベントのスライドやウェブサイト、FacebookやXでも広報の手伝いをしているよ。より多くの学生に社会のさまざまな現場に直接触れてもらい、学内での学びと学外での活動の橋渡しをするのが体験型活動の変わらぬ使命。4月からはInstagramで学生たちの体験型活動の様子を発信しているからフォローをよろしくね。

い 狩猟を体験するプログラムができた暁には撃たれないよう気をつけてね(捨て台詞)。



UTOKYO_TAIKEN

ワタシのオシゴト 第217回

RELAY COLUMN

新世代感染症センター
研究支援チーム 小林未佳

はじめまして、“UTOPIA”の者です



UTOPIAへようこそ

ありがたくも、UTOPIA所属職員のご記念すべき初登場を飾る栄誉に与りました。UTOPIAは2022年秋に白金台キャンパスで発足した、国際高等研究所の3番目の研究機構です。正式名称は「新世代感染症センター（The University of Tokyo Pandemic Preparedness, Infection and Advanced Research Center）」で、感染症の流行から世界を守ることを使命としています。

「研究支援」の業務といえば、研究課題の契約や報告、生物を用いた実験に関する申請などが思いつきますが、それだけではありません。ワクチン開発に向けた企業との連携、全国の研究機関との合同シンポジウムの開催、そして柏IIキャンパスに新設された、治験薬GMP製造教育施設の整備や見学案内。まさかここまで多彩な業務に取り組めるとは、着任前は想像していませんでした。

新設部局の黎明期に伴走するという、幅広い業務を擁する東大職員の中でも稀有な瑞々しさを全力で堪能しています。皆さん今後も、UTOPIAこと新世代感染症センターをよろしくお祈りします。

フラメンコも
踊ります



得意ワザ：ピアノと鍵盤ハーモニカの同時演奏

自分の性格：瀬戸内海のように穏やかで毎日元気に上機嫌
次回執筆者のご指名：峯正也さん

次回執筆者との関係：2年目職員研修のチームメイト

次回執筆者の紹介：ユーモアと愛嬌に富み優しいです

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives
ぶんしょかん



第50回

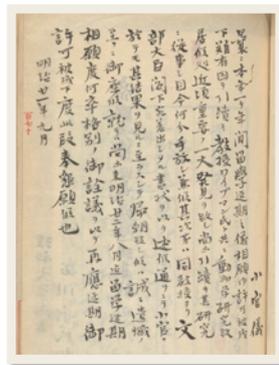
収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

もう少しだけ、いさせていただきます

今回は、当館のデジタルアーカイブで新たに画像を公開した海外留学に関する資料群（『海外派遣教員及び留学生』S0008/SS2）より、明治時代の留学延長願いをご紹介します。

「文部省外国留学生」などと呼ばれていた当時の官費留学生は、滞在地や期間が事前に決まっていたものの、必要が認められれば転学や延期が可能でした。延長等の最終的な可否は文部省が判断しましたが、事前に大学側に意見を照会していたため、延長や転学の願いやその写しが残っています。

右の画像は『留学生関係書類 自明治十九年至同明治二十四年』（S0008/SS2/03）に綴じられていた、明治21年に石川千代松が書いた総長宛ての文書です。石川が延長を願うのはこれが2回目。



当初は明治18年から2ヶ年の予定でしたが、すでに「教授ト共ニ着手シタル研究ヲ結了スル願イハ半途ニシテ」一度滞在を延長していました。

ところがその延長期限が近付くと、「近頃重要ノ一大発見ヲ致シ…何分手放シ兼候」「結果ヲ見ルニ至ラスシテ帰朝致シ候ハ誠ニ遺憾ノ至リ」として再延長を希望。簿冊には師事していたアウグスト・ヴァイスマンの書状も一緒に綴られています。願いは無事聞き届けられ、石川は翌年10月に帰朝するのです。

石川の他にも延長願いを出す人は多く、大学側もその必要性を認める旨の回答を多く残しています。しかし留学の延長が重なれば、新たな留学生の派遣に影響を与えかねません。文部省は明治33年に「必要ト認ムル場合ヲ除キ自今留学延期ハ一切聴許不可成事ニ省議決定」と通知（『留学生関係書類 自明治三十二年至明治三十七年』S0008/SS2/06）。審査が厳しくなったからでしょうか、加茂正雄が明治42年に出した二度目の延長願いは写しにして7ページにもわたり、延長が必要な理由が細かく書かれています（『留学生関係書類 自明治三十八年至明治四十三年』S0008/SS2/07）。

なかには私費留学に切り替えて滞在を延ばす人も。最先端の知識に接し、貴重な機会を逃すまいとする研究者の想いが伝わってくるようです。

（特任研究員・小澤 梓）

インタープリターズ・第202回 バイブル

総合文化研究科 特任准教授
科学技術コミュニケーション部門 **内田麻理香**

自分がオッペンハイマーだったら？

話題の映画『オッペンハイマー』を観てきた。原爆を開発するマンハッタン計画を指揮した物理学者、ロバート・オッペンハイマーの生涯を描いているため、日本でも注目が高い映画である。

「原爆の父」オッペンハイマーは、自身が開発した原爆の被害にどう向き合ったか。彼は、人類初の核実験が成功したとき、ヒンズー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』の一節を思い起こしたと回想している。

「今、われは死となれり。世界の破壊者となれり」

これは、彼が「世界の破壊者」となったことへ反省の表れだという意味で引用されることが多いが、藤永茂は反対意見を述べている^{*1}。オッペンハイマーのヒンズー教への傾倒は本格的だった。この「われは死となれり……」は、ヒンズー教の神クリシュナが「光の子」として現れたときの言葉だ。爆発の閃光を目にしたときの彼が「私たちは『光の子=クリシュナ』を作った」と連想した、と解釈するのが藤永である。私もその藤永説に同意で、拙著^{*2}でオッペンハイマーを取り上げた際この解釈を紹介した。映画でも原爆開発前後の彼の心情に徹底的に踏み込んでいるのだが、やはり実際に原爆が投下されるまでの彼は自分の犯した罪を自覚していない様子である。

しかし、広島、長崎の惨状を知り、ようやくオッペンハイマーの苦悩が始まる。この映画の後半での彼は、理不尽な聴聞会に耐え、罪に向き合う殉職者のような姿である。私も拙著では彼を「逃げなかった男」と評し、晩年の彼は罪を引き受けたという理解をしていた。

しかし、国際政治学者の藤原帰一は映画評^{*3}の中でオッペンハイマーを「核廃絶に向けては、何もしない人。」と手厳しい評を下す。確かに歴史を振り返ってみればその通りである。第二次大戦後には、核兵器の廃絶や平和利用を訴えた「ラッセル・アインシュタイン宣言」が出されたわけだが、そこに彼が加わっているわけでもない。

この映画は、科学コミュニケーションの重要テーマである「科学者の社会的責任」について考える格好の教材である。自分がオッペンハイマーだったらと想像すると、その立場の難しさも理解できる。しかし、彼の状況だったらできなかったことも、その後の先人たちの積み重ね^{*4}を学ぶことで、今に生きる私たちは自らの社会的責任に向き合うことはできるはずなのだ。

^{*1} 藤永茂「ロバート・オッペンハイマー 愚者としての科学者」ちくま学芸文庫 ^{*2} 内田麻理香「面白すぎる天才科学者たち」講談社 ^{*3} <https://hitocinema.mainichi.jp/article/oppenheimer-itsudemocinema> 「藤原帰一のいつもシネマ」『ひとシネマ』
^{*4} 藤垣裕子「科学者の社会的責任」岩波科学ライブラリー

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第56回

ディベロップメントオフィス
アソシエイト・ディレクター

渡部賢太

科博 9 億円クラファンから学ぶ

皆さんは、クラウドファンディング（以下「クラファン」）という寄付獲得の手法をご存じでしょうか。クラファン（crowdfunding）とは、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語で、インターネットを通して自分の活動や夢を発信することで、想いに共感した人や、活動を応援したいと思ってくれる人から資金を募るしくみです。

現在、東大基金には100を超える基金プロジェクトがありますが、これらは所謂クラファン型のプロジェクトで、特定の研究や活動を支援する為に、基金サイトを立上げ、直近の研究活動等について発信することで、更なる寄付獲得を目指しています。

昨年、このクラファンで、史上最高額となる9億円の資金調達を達成したプロジェクトがあります。それが、国立科学博物館（以下「科博」）のクラファンです。先日、この歴史的プロジェクトを主宰した、READYFOR（クラファンの運営・サポートを実施する株式会社）の文化部門責任者である、廣安ゆきみ様（本学のご卒業生）をお招きし、科博クラファンを題材とした、寄付の意見交換会を実施しました。

当日は、東大基金のファンドレイザーだけでなく、各部署で基金立上げに携わる職員にもご参加いただき、「目標金額の設定」「刺さるキャッチコピーの作り方」「返礼品の考え方」等、様々な質問を交えて、基金立上げから研究・活動への伴走支援、寄付の獲得に至るプロセスを学びました。今後も学内外からファンドレイジングに関わる方をお招きし、勉強会や意見交換会を実施することで、東大基金の更なる寄付獲得を目指していきます。



意見交換会の様子

東大基金・プロジェクトページ
<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project>



東京大学基金事務局（本部渉外課）

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

| 掲載日 | 担当部署・部局 | タイトル (一部省略している場合があります) |
|-------|--------------------|---|
| 5月14日 | 本部渉外課 | 東京大学基金 寄付者インタビュー 第二十六回 創業者の遺志を継ぎ、未来へと繋いでいくために |
| 5月14日 | 本部協創課 | AI-RAN アライアンスへの加盟について |
| 5月14日 | 広報室 | 溶姫御殿のトイレから発見された高濃度の鉛の正体とは？＝堀内秀樹 尿中の脂質でアレルギー疾患を診断する＝村田幸久 美術史から読み解く小便小僧～プエル・ミンゲンスについて＝秋山聡 縄文時代の人々の糞石でヒト寄生虫のDNAを探索＝小金淵佳江 海の季節を演出する陰の立役者としての排泄物＝福田秀樹 / 東大の排泄関連研究(7)～(11)「淡青」48号より |
| 5月20日 | 本部広報課 | 【ガイド募集】「東京大学キャンパスツアー」2024年度採用について |
| 5月21日 | 本部渉外課 | 宮沢佳恵 准教授 東京大学基金研究者インタビュー |
| 5月21日 | 本部ダイバーシティ推進課 | 「なぜ東京大学には女性が少ないのか？」東大の女性たちが実際にかけられてきた言葉を掲出 |
| 5月21日 | 広報室 | 能登半島地震と日本海側地域の断層——地形・地質・構造調査から分かること |
| 5月27日 | 未来ビジョン研究センター | グローバル・コモンズ・スチュワードシップ (GCS) 指標 (2024年版) 地球の安全な活動領域を守るためのグローバルな生産と消費の変革 |
| 5月30日 | 総合文化研究科・教養学部 | 「東大に女子を増やそうプロジェクト」卒業生インタビュー動画 [3] を公開しました |
| 5月30日 | 本部国際研究推進課 | 令和6年東京大学ーフランス国立科学研究センター共同研究プログラムの実施 |
| 6月3日 | 附属図書館 | 東京大学のデジタルアーカイブのポータルがリニューアル！ |
| 6月3日 | 本部情報戦略課 | 【注意喚起】東京大学役員を装った迷惑メールにご注意ください |
| 6月4日 | 本部渉外課、先端科学技術研究センター | 「ネイチャーポジティブ基金」寄付募集を開始 |
| 6月5日 | 本部学生支援課 | 東京大学アメフト部の快挙！太田明宏選手がU20日本代表に選出！ |
| 6月6日 | 本部学務課 | BOOST NAIS 2024 年秋入学の博士課程出願者を対象に募集 |
| 6月6日 | 本部学生支援課 | ラグビー部が東京地区国公立体育大会決勝に進出 |
| 6月7日 | 教育学研究科・教育学部 | 教育学研究科・教育学部留学生懇談会を開催 |
| 6月10日 | 本部広報課 | 授業料の値上げに関する報道について |
| 6月10日 | 本部渉外課、定量生命科学研究所 | 「定量生命科学研究所」寄付募集を開始 |
| 6月11日 | 先端科学技術研究センター | IUPAB Young Investigator Prizeを受賞 |
| 6月11日 | 本部学務課 | SPRING GX 2024年度秋入学の博士課程出願者を対象に募集 |



CLOSE UP 新入留学生との懇談会を開催

(教育学研究科・教育学部)



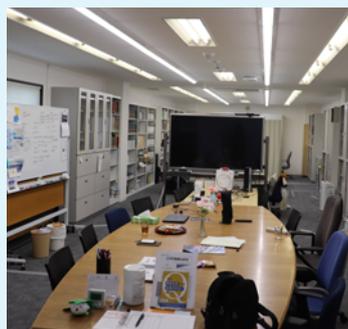
懇談会参加者の集合写真

教育学研究科・教育学部では、5月22日の18時より教育学部ラウンジにおいて、新入留学生を歓迎して留学生懇談会を開催しました。懇談会には、留学生、国際交流センターチューター及び教職員の計27名が出席しました。

森田賢治准教授（国際交流委員会委員）の司会進行のもと、勝野正章研究科長による開

会の挨拶で始まり、懇談が始まりました。新しく入学した外国人留学生と在学留学生が自己紹介を行い、自身の研究や将来の夢、趣味などを話しました。

最後に針生悦子副研究科長による閉会の挨拶があり、留学生、教職員、チューターらが一堂に会して交流の輪が広がり、大盛況のうちに会は終了しました。



表紙について

今号の表紙は、百五十年史編纂室作業グループの青山明音さん（農学生命科学研究科博士課程）が描いた編纂室のイラストです。「東京大学一五〇年史編纂室通信」第2号の巻末に登場していたものを、今回の本誌特集記事にあわせて掲載してもらいました。本郷キャンパスから少し離れた場所にあるビルの7階の編纂室（左写真）では、学内から集められた『運動会報』『経友』といった資料の整理作業と、年史編纂のための議論が、日々大机を囲んで行われています。





CLOSE UP 「東大に女子を増やそうプロジェクト」第3回動画を公開 (総合文化研究科・教養学部)



東大を目指したきっかけ、受験で感じた不安、サークル活動の話も登場しています。

www.youtube.com/@utokyo_komaba

東京大学には約7,000人の女子学生と約4,900人の女性教職員が所属しています。全構成員の割合からすると少数ですが、一人ひとりが、それぞれの夢や目標に向かってさまざまな活動に励んでいます。女子学生や女性教職員を支援する改革の取り組みの一つとして、本学に入学した全ての学生が最初に学ぶ教養学部では、高大接続に重点を置き、「東大に女子を増やそうプロジェクト」を進めています。本プロジェクトは、社会で活躍する女性卒業生のインタビューを通して、東京大

学での学びと社会での活躍の接続を具体的に探り発信することで、本学を目指す女子高校生を応援したり、在学中の女子学生の意欲を高めたりすることを目的としています。

第3回目の今回は、現役東大生のインタビューア-2名が卒業生でDEI推進者の塚原月子さん(1995年経済学部卒業)にインタビューを行いました。インタビューの様子と塚原さんから未来を担う皆さんへの魅力溢れる応援メッセージは、教養学部公式YouTubeチャンネルからご覧いただけます。



CLOSE UP 東大基金研究者インタビューに宮沢佳恵先生が登場 (本部渉外課)



上野博士とハチ公の像をバックに

東京大学にまつわる多彩なゲストを迎え、渋澤健氏がナビゲーターとなり、様々な切り口で「東京大学と世界のミライを紐解く」対談シリーズ「UTokyo Future TV」。2023年8月にUTokyo Future TV第11回のウェビナーとして実施された対談の記事を公開しました。今回のゲストは、農学生命科学研究科農学国際専攻の宮沢佳恵准教授。テーマは「私たちは豊かで持続可能な畑や森をミライに残せるのか?」。私たちが豊かに生活する活動を行いつつ、豊かで持続可能な畑や森をミライに残すことに繋げる可能性について、とことん対話を深める内容となりました。「自然が作り上げた最適な循環を、人の手で豊かに循環する仕組みをデザインしたい」と農学部に転向した宮沢先生の研究とは? 東大基金のプロジェクト「畑と森を再生する糸状菌の活性化基金」とは?

るのか?」。私たちが豊かに生活する活動を行いつつ、豊かで持続可能な畑や森をミライに残すことに繋げる可能性について、とことん対話を深める内容となりました。「自然が作り上げた最適な循環を、人の手で豊かに循環する仕組みをデザインしたい」と農学部に転向した宮沢先生の研究とは? 東大基金のプロジェクト「畑と森を再生する糸状菌の活性化基金」とは?



CLOSE UP ラグビー部が東京地区国公立大会の決勝戦に進出 (本部学生支援課)



2回戦では東工大を28-14で撃破!

本学運動会ラグビー部は、東京地区国公立体育大会(国公立大会)の決勝戦に駒を進めました。国公立大会は、東京都に所在地を置く国公立大学がトーナメント形式で争う大会です。本学が決勝に進出するのは、1995年に優勝して以来、29年振りの快挙です。決勝では昨年の優勝校である東京学芸大学と激突。本学は昨年の準決勝で32-14で敗れてお

り、今年は昨年のリベンジをかけて戦いましたが、28-29で惜しくも準優勝となりました。また、アメリカンフットボール部の太田明宏選手(教育学部・3年)が、カナダ・エドモントンで6月20日~7月1日に開催の第1回IFAFアメリカンフットボールU20世界選手権の日本代表に選出されました(次号で紹介予定)。運動会の若者たちが躍動しています!



CLOSE UP CNRSとの共同研究プログラムを実施 (本部国際研究推進課)

東京大学とフランス国立科学研究センター(CNRS)は、両機関の合意の下で2021年度より共同研究プログラムを実施しています。このプログラムでは、両機関で行う共同研究に対し、共同でプロジェクトの支援を行います(博士課程大学院学生の支援を含む)。プロジェクトに参加する大学院生は、この共同研究の成果をもとに学位取得することを目標とします。今回は、2023年度に続き、3回目のプロジェクト募集となりました。支援期間は3年間で、主な共同研究フ

ールドは、Social Science、Data-driven interdisciplinary challenges in Earth observation & environment、AI for Science、Science for AI、Energy Transitionの4分野及びCNRS・本学間の国際研究ラボ(IRL)関連としていますが、それ以外の分野からも申請可とし、2023年11月から2024年1月まで公募をした結果、計25件の申請がありました。両機関のSteering Committeeによる審査を経て、計5件の採択プロジェクトが決定し、今秋から各プロジェクトが開始される予定です。



¥2,500 (税込)

UTokyo 「蓮香オードパルファム」で爽やかな気分

UTCCからのお知らせ

「蓮香オードパルファム」は、大賀一郎博士が古代ハスの種子を発芽させることに成功して名づけられた大賀蓮(右写真)の香りをイメージして作られました。水辺を彩る淡紅色の美しい花を思わせる爽やかでやさしい香

りは、年代性別問わず幅広い方々にお使いいただけます。普段使いもしやすく穏やかな余韻に包まれた気分になり、リフレッシュしたい時にも最適です。お洒落なプレゼントとしてもきっと喜ばれるはず。(田)





海洋観測の現場から

大学院以来、海洋底の調査を行っている。調査船から機器を下して熱流量測定、潜水船に乗り込み、海底熱水域や断層出口付近の生物群集で温度計測、掘削船で南海トラフ震源域を3000mまで掘削など。

観測の現場では指示が正確に伝わらないと事故が起こりうる。意味が不明瞭な場合はくどいくらいに確認しあうし、作業状況を関係者に一斉放送する。海底堆積物を直径8cmのパイプ内に採取する「ピストンコア」(写真)作業中、最も緊張する着底作業では、「ウインチ(へ、こちら)研究室、今から着底させます。秒速1mでワイヤー繰り出し、こちらの「着底」の合図でウインチストップしてください」とアナウンスする。着底時にワイヤーを繰り出しすぎると装置に絡んで、引き抜く時に最悪の場合ワイヤーが切断し機器を失う。なのでウインチマンへの指示には、あいまいなところがあってはならないし、指示する人は一人ではなくてはならない(船頭多くして船、山に登る)。

作業は一人ではできない。学生であっても自分がすべきことを的確にこなすことが求められる。最初是要領がわるく、危険が伴う場

合(例えば機器を吊り下げているワイヤーの下に入った時=ワイヤーが万一切れると命にかかわる)にはシニア研究者や乗組員から叱られる。しかしそのうち慣れてきて、次に何が起るかを予測して行動できるようになる。一方、24時間一緒にいるので、オペレーションの方法を伝授する時間、取れたての観測結果を前に議論する時間はたっぷりある。このデータは自分たちしか知らない、その幸せをかみしめている間は浮世のさまざまをしばし忘れることができる。

SNSでは短い言葉で意図を伝える必要があるからか、まるで俳句のように凝縮した素晴らしい表現を、みなさん普通にやっている。一方で、短い言葉では伝わらないことをいかに正確に伝えるか、その訓練はどうなっているのだろうか。「難しいことを簡単に伝える」ためには、訓練以前に内容を深く理解する必要がある。先人の知恵を継承するために、まだまだ精進が必要だと感じる。

木下正高
(地震研究所)

